第二の人生はゲームらしいです～『イレギュラー』

紅優也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
第二の人生はゲームらしいです～『イレギュラー』

【Ｎコード】
Ｎ４６５７Ｚ

【作者名】
紅優也

【あらすじ】
この作品はてんびん座様の『第二の人生はゲームらしいです～』に私の作品のキャラをクロスさせた作品です。
出来る限りてんびん座様の作風を壊さないように頑張りますので生暖かい目で見て下さい。

プロローグ（前書き）

始まりは怒りと交渉

プロローグ

世界の意思ＳＩＤＥ

『……また始めるか。』

『転生者ゲーム』。

神々の気紛れで決められた転生者による気紛れゲーム。

数年前『教授』こと『レン＝ベルツ』による神々に対する反乱を起こして以来第二の教授の出現を恐れて誰もやらなくなったが今回は凄まじ過ぎる教授の進撃に恐れをなした最高神が教授の進撃を止めようとしたが世界の崩壊を恐れていたために教授の口車にあっさり乗せられ再び始める事にしたらしい。

『再び俺が治める世界を戦場に選ぶとは良い度胸をしているな……レン＝ベルツ……』

俺はゆっくりと立ち上がり神界に俺を転送する。

「「ない。」」

「ほお、転生者ゲームをやるのか。

そのゲーム、俺も混ぜてもらおう。」

俺の言葉に最高神の馬鹿共は絶句しレン＝ベルツは此方を振り向き

……

「誰だお前は？」

と、言った。

……

教授ＳＩＤＥ

「（……何だこいつは？）」
俺こと『レン＝ベルツ』は突如絶句した二人の最高神の視線の方向に振り向いたらそこには絶句している二人とは比べ物にならない程の威圧感を誇る男（と、言うよりは『漢』だな）が立っていた。

「誰だお前は？」
「俺か？
俺はお前達が転生者ゲームを行う世界『魔法少女リリカルなのは』の全ての世界を治める『世界の意思』だ。
そこの馬鹿二人とは色々と因縁があってな。
あと言葉に気を付けろ若造。」
男『世界の意思』が溜め息を吐きながら俺に注意をする。

「はん！
てめえなんざが出る幕じゃねえんだよ！死ね！」
言いながら俺の部下である『ライア＝ベルツ』が飛び掛かり……俺と俺やライアと一緒に来ていた部下の一人『ルナ＝ベルツ』の上をライアが飛び越えていった。

「「……は？」」
「ふん、貴様の部下は口は一人前だが腕は半人前以下だな。
俺の実力を見切れんとは。」
ポカーンとした表情で吹っ飛んでいったライアを見ていた俺とルナにパンパンと手に付いた埃を落としながら世界の意思が言った。

「一応言っておくが貴様等が俺の転生者ゲームへの参加を認めなかった場合は即座にお前達全員の転生者が俺の管理する世界に入れぬ様に『拒絶』をかけて戦い事態を成り立たなくさせてやる。」

ち、面倒くさい奴が介入してきたものだぜ。

「……しょうがありませんね、許可します。」
「ち……好きにすれば良いだろ。」
「ち……戦い事態が成り立たなくなるよりは増しだ。
参加しろよ。」
最高神達も俺も渋々ながら世界の意思の転生者ゲームへの参加を許可する。

「ふん、当然だ。
ルールを決める際は俺も呼べよ。」
そう言って世界の意思は自身を転送していった。

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！
あんの糞野郎が！絶対に『ギャフン』と言わせてやる！」
「そうですね～～あいつの泣きっ面を見てみたいものです。」
世界の意思が去るとライアは猛り狂いルナは冷たい殺気を発する。

「お前等『今は』落ち着け。」
俺は二人を宥めながら他の部下が入るところまで転送した。

続く

プロローグ（後書き）

如何でしたか？
次回は世界の意思の転生者が明らかになります。
次回『転生者は迷惑を掛けた奴』
お楽しみに！

第一話（前書き）

転生者は迷惑を掛けた奴

第一話

世界の意思ＳＩＤＥ

よう、世界の意思だ。
俺は今レン＝ベルツや馬鹿二人とルールについて決めてきた所だ。

因みにルールだ。
『転生者は同じ年齢とする。』

『転生者は無印、Ａ，ｓ、ＳｔＳまでは最低でも辿らせる事。』

『転生者は殺さなくても降伏、若しくは勝手に死んでも敗北とする。
転生者は降伏したら神と話したりした事や特典についての全ての記憶を失う。』

『転生者は現地では自身が転生者だと知られてはならない（知られた場合は降伏した場合と同じ罰を与えられる）。』

『転生者の肉体は死亡する直前若しくは直後とする。（なお、破った場合はその転生者を転生させた神は問答無用で敗北とする。）』

『転生者に対する特典は三つとする。
増やす事も減らす事も禁ずる。
（破った場合はその神は問答無用で敗北とする。）』
が、ルールだ。
因みに（）内の言葉は全て俺が提案したルールで馬鹿共が承認した。
レン＝ベルツの事だから下手をしたらルール無用のやり方をしかねんしな。

まあ……

「奴等が転生させる奴は分かり切ってるがな。」
レン＝ベルツは恐らく奴が所有する天使共の内一人を転生者として登録するだろう。

赤毛の最高神はそれを予測して絶対にレン＝ベルツに対して恨みを持つもの……即ち前回の転生者ゲームでレン＝ベルツにこてんぱんにやられた奴等の内一人を自身の転生者に仕立てあげるだろう。

金髪碧眼の最高神はその逆手を取り恐らく原作キャラの身内になりそうな奴を自身の転生者に仕立てあげ何もできないようにするに違いない。

「ふむ……」
予測出来たとしても俺がこのゲームについて素人なのは否めん。
誰を転生者にすべきか……ん？転生者？

「『目には目を歯には歯を魔導士には魔導士を転生者には転生者殺し』だ！」
奴を使おう！

……
ゼロムＳＩＤＥ

「っで、僕なんですか！」
「っで、お前なんだ。」
僕『ゼロム・グラシアム』は目の前でニコニコ笑っている人『世界の意思』を見ながら突っ込みを決めた。

いきなり『来い！』と言われてこの空間に連れ攫われてみれば『転生者ゲームに参加しろ！』と言われるし……はあ。

「まあ、僕に拒否権は無いんですけどね。」

「まあな。」

世界の意思は僕が『レイス・クロフォード』によって『アスラクライン』の世界に吹き飛ばされた際に再びこの世界に帰れる様にしてくれた恩があるから断る訳にはいかないんだよね。

「で……望む特典は何だ？」

『特典』……第二の人生を生き残る為のキーカード……

「……皆の能力や魔法を『神の卵（ハンプティ・ダンプティ）』に登録しておいて下さい。」

一つ目は単純に僕のレアスキルの強化。

皆の能力があれば此方にぐっと有利になる。

「解った。二つ目は何だ？」

「二つ目は……八神部隊長の弟として転生させて下さい。」

『ＰＴ事件』から始めるのなら両方と戦いやすい人間の家に転生するのが利口な方法だろう。

「相変わらず頭良いなお前は。

最後は何だ？」

「デバイスは最初から所持で『ゼロ』と『リィン』を使わせて下さい。」

今までずっと一緒に戦ってきた二人を今更使わないなんていう法律は無い。

「ま、妥当な願いだよな。」
世界の意思はこほんと一息おいた後……
「適当に逝ってこい。」
え？字が違……
僕の意識はそこで途切れた。
続く

第一話（後書き）

如何でしたか？
次回はゼロムが負け犬剣士こと『河内亮』と最強転生者こと『高町星』に遭遇しますが戦闘はしません。
次回『温泉と予言とニュータイプ』
お楽しみに！

第二話（前書き）

温泉と右ストレートとニュータイプ

第二話

零（ゼロム）ＳＩＤＥ

僕『ゼロム・グラシアム』こと『八神零』は只今姉である『八神はやて』と一緒に温泉に来ておりました。

「零～～～はよ温泉行こうや～～～！」

八神部隊長もといはやて姉さんはこの頃って本当に純情なんだなあと僕の世界でのセクハラ部隊長の顔を思い浮かべながら思っていた。

「いや、幾ら何でも早すぎるよ……ちょっとは休ませてよ……「問答無用や！」いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

訂正この強引な性格はやっぱり未来の八神部隊長に似通っている。

『マスター……心中お察しします。』

ありがとうゼロ……

因みにリィンやゼロは四歳の誕生日の時に父さんがくれたペンダントがゼロだった。リィンは元から傍にいるというおまけ付きである。

……

「はあ……もう良いよ解ったよ。

入るよ入るからこの手を離して。」

はやて姉さんに強引に温泉の暖簾の前まで連れてこられた僕は観念して温泉に入る事にした。

「♪～～～零は知らんやろ？」

？何を？

「十二歳までは混浴ＯＫなんよ温泉って♪」
……忘れてた！

「ほな、入りましょ♪」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
僕ってやっぱり不幸体質だなあ……

……
「うううう……やっぱり女湯って恥ずかしいよう……（焦）」
誰かが入ってきたら僕は『何で入ってるの！（怒）』とか言われて怒られるのでは無いかとヒヤヒヤしている。

「う～～～ん！気持ち良いなあ～～～！」
そんな僕の気も知らず強引に連れてきた姉は僕の非難の視線にも何処吹く風だった。

「もう……出て男湯に入るよ。」
「あ……もう……もうちょい姉弟のスキンシップしようやん。」
「姉さんが強引に連れてきたくせに何を言うのさ。」
僕は脱衣場への扉を開け……僕の視界一杯に飛び込んできたのは幼い頃の高町一等空尉と友人の『アリサ・バニングス』さんと『月村すずか』さんと『星』さんとそれから見知らぬ少年の裸体だった。

「あ……」
しまった誰かが入ってくるのを完全に失念してた。

「き、キャアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
ボカン！

僕は高町一等空尉の右ストレートを受け漫画の様に宙を舞った。
流石高町一等空尉……幼少とは言え良い拳をしてます。
僕は温泉に思いっきり体を叩きつけられながらそう思った。

……

亮《負け犬》ＳＩＤＥ

「ご、ごめん！痛くない？」
「う、うん。（本当は頬が激しく痛いです……）」
「もう、慌てて出るからそうなるんやで？」
「いや、姉さんが強引に僕を連れてきた所為だと思うけど？」

俺『河内亮』は風呂から出ようとしてなのは達の裸体を見てしまった為になのはにぶん殴られて漫画の様に宙を舞った少年『八神零』にある疑いをかけていた。だってそうだろ？
はやてに弟なんていないしそもそもはやてとなのははこんな出会い方をしない。
そして……一番ムカつく事はなのはが頬を赤らめている事だ。

「（……まてよ？
何でこいつは出会って間もないなのは達に打ち解けてるんだ？）」
なのは達の話を聞いていると何だか零はなのは達の好みや性格を把握している様に思える。
はやては姉だからってちゃんとした理由があるからまだ良いとしてなのは達はおかし過ぎる。

「（まさかこいつは……『教授』の……『ベルツ』側の転生者の仲間か！？）」
だとしたらなのは達に打ち解けているのは後に機動六課に入った際

に裏切りを行うのに絶好のポジションを得るためだと解釈できるしなのは達にフラグを建てれば管理局を裏切らせるのも容易いからだ。

「（くそ！ふざけやがってその温和な顔の下にどんな狡猾な策を隠してやがる！
なのは達は絶対に俺が守る！）」
八神零……お前の化けの皮は絶対に剥いで切り刻んでやるぜ！

……
零ＳＩＤＥ

「（本当に便利だな『ニュータイプ』って。）」
僕は今転生者の一人である『河内亮』の心を覗いてみたんだけど（僕に完璧な敵意を向けていたからだ）……疑われたもんだね。

「（『教授』、『ベルツ』。
これはもう一人の転生者の所有神だと考えて良いな。）」
『高町星』さんも転生者だろうけど今は転生者四人が揃ってから行動した方が良いだろう。
二人を此処で片付けても良いんだけど教授側の転生者が洒落にならない強さだったら大変だしその時の都合の良い生け贄（みがわり）がいないとね。

「じゃ、姉さん僕は出るよ。」
「ん、ちゃんと体を良く拭くんやで？」
「解って……はれれれれれ……？」
温泉から出ようとしたら視界が揺れ倒れそうになる。あ、逆上せたのか……

なのは（名前呼びを許可された）が僕を慌てて支えようとして……
僕が押し倒す形になり唇が重なった。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？

零のファーストキスがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

はやて姉さんの悲鳴を聴きながら僕の意識は途絶えた。（因みに僕は今六歳です。）

………

目を覚ましたらなのはが顔を深紅に染めて隣に座っていた。

浴衣は此処の備え付けだろうし、布団がかけられているのは逆上せたからだろうけど……

「え～と……何で？」

「何でなのはがいるの？」

「はあ……貴方がなのはの唇に重ねちゃって気絶した後なのはも真っ赤になって気絶したんですよ。」

何時の間に来たのか星さんがそこにいた。

「え………～～～～！！！／／／／」

思い出されるなのはの唇の柔らかさ、そして何故か高鳴る胸の鼓動。

「すいまっせんでしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

で、土下座。

「「何で！？」」

重なる二人の声（流石姉妹だね）。

「いや……その……六歳なのにファーストキスを奪っちゃったから……」

僕は顔が赤くなるのを感じながら土下座の理由を述べる。

「？？？それがいけない事なの？」
「（……多分十五、六歳で転生しましたねこの子は。）」
なのは……君はファーストキスの意味を知らない。
それから星さん、それは自分が転生者って事をバラす様な考えですよ？

「そ、それは今は置いといて。
あ、あのね零君……その家に食べに来てくれない？」
なのはさん（僕の世界ね？）の実家は『翡翠屋』っていうケーキ屋を営んでいて（最初は僕も『ヨハネ』も『ペテロ』も『嘘だ～～～。』と思ってたけど本当だった。）前世では良く利用していた。

「え？別に良いけど……」
「本当！？ありがとう！」
ニコニコと笑うなのはに何だか胸がドキドキする僕だった。

（「「「やっぱりゼロム（君）って朴念人だな（だよね）。」」」）
頭に現れた『織斑』さん、『吉井』さん、『衛宮』さんの三人は殴り倒した。

にしても……なのはの家に行ったその日に戦闘になるとはね……

続く

第二話（後書き）

如何でしたか？
因みにこの作品のヒロインはなのはです。
次回は零がルナに遭遇し三人と戦闘します（因みにその時亮をぼこぼこにします）。
次回『遭遇と忘れと本家との差』
お楽しみに！

第三話（前書き）

遭遇と忘れと本家との差
負け犬超アンチです！

第三話

零ＳＩＤＥ

僕は今なのはと星さんに連れられ姉さんと一緒に二人の家の『翠屋』（ここら辺は世界の違いか？）に来ていた。

「はあ……」

「何や溜め息なんて幸せが逃げて行くで～～～？」

姉さん、貴方は此処にいる男子が僕だけだという事を気にしないからそう言える。

因みに河内亮は何か用事があるとかいって帰った。

うう……緊張するなあ……

考えている内になのはが扉を開けて僕らを招き入れる。

やれやれ……此処まで来たからには腹を括るしか無いよね！

……

ルナＳＩＤＥ

今日は『ルナ＝ベルツ』です。

私は翠屋にシュークリームを食べに来た所です（因みに私が作ったのよりも美味しかったので軽い敗北感を味わいました）……て、誰に説明しているんでしょうか私は？

すると店に三人の女の子と一人の男の子が入ってきました。

二人は見覚えがあります。

高町なのはと八神はやて……あれ？

二人ってこの段階で知り合いでしたっけ……？
私はもう二人を見て危うく飲んでいたコーヒーを吹き出す所でした。
「ん？ああ、なのはに星……友達か？」
何故カウンターにいる青年は八神はやてに似た少年に殺気を飛ばすんでしょうか？

「あ、うん。そうだよ。」
「や、『八神零』と申します宜しくお願いします。」
「八神はやて言います宜しくお願いします。」
星さんに零さん……星さんはなのはさんに似た容姿を持っていますが髪はショートカットです。
零さんは八神はやてに似た容姿を持っていますが此方は銀髪を背中まで伸ばしているのでうっかりすると女の子にも見えてしまいます
（ここら辺には私は親近感を持てます）。

私はなのはさんもはやてさんも双子とは聞いていないので十中八九転生者ですね～～～。

「（早速見付けました～～～。）」
『（どうします？今仕掛けますか？）』
と、私のデバイスである『アルテミス』が聞いてくる。

「（いえいえあの性悪の『世界の意思』とかが選んだりした転生者ですよ？）」
そんなに簡単に上手く行くわけがありません。
……少し探りますか。

私は周囲に他の客がいるのを確認し……全力で殺気を出しました。

星さんは椅子をガタン！と言わせて立ち上がり……あれ？
零さんが立ち上がりませんね～～～？
因みになのはさんとはやてさんはきょとんとしていました。
それからカウンターの青年はキョロキョロと店内を見回していました。
何ですかこの店は？
超人喫茶か何かですか？

まあ、これで星さんの力量は解りました恐らく彼女は純粋な魔導士か半人前でしょう。
零さんについては……今は保留にしておきましょう。
私は残ったコーヒーを飲み干し……その瞬間封鎖結界が発動しました。

……
零ＳＩＤＥ

「（殺気……こっちが反応するかどうか見てるねあの人。）」
ベルツ側の転生者の人、甘いよ。
僕は『白獅子事件』の際にその手でシグナムさんにばれて戦闘を強いられたんだからのるわけが無い。
だけど案の定と言うべきか言わざるべきか……星さんは椅子をガタン！と鳴らして立ち上がった。
因みに恭也さんは店内を見回した。
相変わらず武術の達人が多いよねなのはさんの家族って。

「（さてと……）」
僕は腰のポーチに手を入れてＵＳＢメモリの様な物体……『ガイアメモリ』の内『Ｓ』と書かれたメモリを取り出す。
そして封鎖結界が発動したので……

「（ごめん、皆。）」
『ストップ！！』
瞬間封鎖結界の中（因みに封鎖結界の中の人には解らない）と転生者以外は全て僕が使ったガイアメモリ……『停止の記憶』を持つ『ストップ』のメモリの効果により動きが止まる。

「ん？どうやら星さんと他一名は外に出たみたいだね。」
お金を置いていく辺りが律儀だ。

「さてと……『ライアーズマスク』。」
僕は神の卵に内蔵されている力を使い前世の顔にして八神零だとばれないようにする。

「さて……『ライガーゼロ・改』セットアップ！武装は『イエーガー』！リィン、行くよ！ユニゾンイン！」
『了解です、マスター。』
『はいです！』
ゼロは『ペンダント』からリィンは『僕の影』から答え僕の体に黒い外套とブースターが大量に着いているネイビーブルーの鎧が装備され更に装甲に銀色が追加される。

「さ～～～てと！」
『アクセル！！』
僕は『加速の記憶』を持つ『アクセル』メモリを使いイエーガーの最大加速を越えたスピードで二人を追い始めた。

……
僕が現場である『海浜公園』に来た時は既に戦いは始まっていたけど……

「貴方誰でしたっけ？」
ベルツ側の転生者が河内亮に首を傾げている場面に遭遇した。

「誰、だと……？」

「あ、すいません～～～～初対面の人には挨拶をしませんとね！
私の名前は『ルナ＝ベルツ』です～。」
ふむ……と、すると『教授』が敵の名前か。

「……テメエ、ふざけるな！！」
無理だよ河内亮。
踏まれた人間は忘れにくいけど踏んだ本人は忘れやすいんだよ。
最もルナ＝ベルツは他人を戦車で踏み潰しても忘れてそうだけど。

「まさか……本当に覚えて無いのか？」
「だから貴方とは初対面ですって。」
うん。完璧にルナ＝ベルツは君の事を忘れてるね。

「俺だ！俺！河内亮だ！」

「河内さんですか……誰でしたっけ～～？」
本当に最低な人間ですね貴方は。

「ふ、ざけんな！
力尽くで思い出させてやる！」
そして二人は剣を重ね合うけど河内亮もルナ＝ベルツも中々の使い手だ織斑さんや衛宮さんと良い勝負をするかもしれない。

だけど……

「そんな小さな腕や足で適うと思いますか～～～？」

リーチが違い過ぎる。

多分変身魔法を使って大人になってるんだろうけど先ず剣は腕が互角の場合は距離が勝敗を分ける。

あっさり河内亮が蹴り飛ばされそのままルナ＝ベルツが近寄り……ん？手を翳して何をするつもりだ？

「食らいやがれ！『ＡＩＣ』！」

……あ？

次の瞬間バインドも使われていないのにルナ＝ベルツの体が止められる。

……ふざけるなよ？

その力は『ラウラ』さんの象徴なんだ！お前が使っていい力じゃないんだよ！

「やれ、星！」

「『ブラストファイヤー』！！」

な！？デバイス無しで砲撃！？どんなチートだよ！？

『リジェクション』

だけどルナ＝ベルツはシールドを斜めに展開する事であっさり防いだ。

そしてＡＩＣが凍り付き砕け散った。

「ふむ、中々の腕前ですがそれが本気なら興醒めです～～～。取り敢えず二人仲良くジ・エンドです。」

「誰が！

ジ・エンドはテメエだ！」

そして猿真似野郎の前に『ミッドチルダ式』の魔方陣が複数出現して……何も起こらない……？

まさか……

「！？ご……あ……」

ルナ＝ベルツが吹き飛ばされる。

やっぱり……

『マスター。

言う必要は無いかもしれませんがあれは『鈴』様の『龍砲』です。』

そうか……ははは……そうかよ！

僕は隠れていた茂みから飛び出し……

「どうだ！龍砲の威……「黙れよ……猿真似野郎がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！歯を食い縛れ！！！」ぐはあ！？」

思いっきり猿真似野郎を殴り飛ばした。

……

亮《負け犬》ＳＩＤＥ

「どうだ！龍砲の威……「黙れよ……猿真似野郎がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！歯を食い縛れ！！！」ぐはあ！？」

ルナ＝ベルツに俺が新たに得た力を披露したら突如脇から殴り飛ばされた。

「ぐ……！

テメエ……何者だ！」

「僕か？僕の名は『ゼロム・グラシアム』！

君達と同じ転生者だ！！」
な、何だって！？
八神零は転生者じゃないのか！？
「え！？じゃあ八神零は何者ですか！？」
ルナも驚いたらしく珍しくアイツが慌てていた。
「ふん、お前達が言うところの『オリキャラ』って存在じゃないかな？」
オリキャラ……そうか、俺やルナっていうイレギュラーが入るんだ。
当然な答えかもしれない。

「待てよ……猿真似ってどういう意味だテメエ！」
「そのままの意味だ。お前がその能力を使う事は『ＩＳ（インフィニット・ストラトス）』のキャラクターを侮辱しているのと同じ事だ。」
「テメエ……！
舐めんなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！龍「はあ……こんな馬鹿に龍砲を使われる鈴さんも不幸だな。らあ！」ごふう！？」
俺が龍砲を使おうとしたらゼロム・グラシアムが接近していた。
何……で？

「ふん、素早い相手には自らの動きを固定してしまう龍砲は不利なんだよ。
使い手ならそれ位覚えとけ。」
「ぐ……舐めんな！
『ブルーティアーズ』！」
俺はビットを出しゼロムに向かわせる『セシリア』との違いは俺も動ける事だぜ！

「馬鹿が。」
一瞬で四つのビットを全て爪で砕いたゼロムは神速でやってきて俺を蹴ろうとして……俺はＡＩＣを使い止める。
「……お前は多分噛ませ犬だな。」
何とＡＩＣを振り切りそのまま俺に蹴りを決めた。
「ご……ふ……」
「……『セシリア』さんは動けなくてもビットの動きは複雑で精緻でそしてコンビネーションも抜群だった『ラウラ』さんは使われたら身動きすら取れなかった。
……お前は中途半端な猿真似なんだよ！」
猿真似……違う！
さっきまでは新しい力だったからだ！
最初から持っていた力は負けない！
「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！『零落白夜』！！」
「……『輻射波動』。」
バリアなんか効くかよ！
ガギン！

「な………！あ………あ………」
「所詮は猿真似、出力最大とはいえまさか輻射波動で作ったバリアを切り裂けないとはね。」
俺の刃は……赤いバリアに一ミリもめり込んでいなかった。
「……失せろ。鳴り響け……終焉の笛！『ラグナロクブレイカー』！」
俺ははやての必殺魔法を受け気絶した。

続く

第三話（後書き）

如何でしたか？
次回は戦闘はありません。
次回『原作開始まで残り一年～それぞれの光景～』
お楽しみに！

第四話（前書き）

原作開始まで残り一年～それぞれの光景～

第四話

零（ゼロム）ＳＩＤＥ

「ＰＴ事件まで残り一年か……」
僕ははやて姉さん（因みに足は一年前に悪くなってしまった……）が寝静まった隙を狙って無人の『管理外世界』に来ていた。
目的？闇の書を速く集めるための魔力を貯める為だよ？
下手に『闇の書事件』を長引かせたらなのはや星さんが危険だし（僕達転生者の魔法を吸収したらリィンさんが手を付けられない強さになっちゃうからだ）織斑さん達の能力の猿真似野郎『河内亮』を『ＳｔＳ編』……まあつまり『機動六課』が編成された時に八つ裂きにするためだよ？
因みにあの後『ラグナロクブレイカー』で猿真似野郎を吹き飛ばしたけど殺す前に星さんが正確無比な砲撃を加えてきてさっさと撤退せざるおえなかった。
あ、『ストップメモリ』で止めた時間はちゃんと戻しといたよ？
それからなのはは『何時でも遊びに来て良いよ！』って言ってたけど僕は餓えたライオン二匹（士郎さんと恭也さんね？）の『妹（娘）に手を出したら許さんぞ～～～～？』という視線を毎回受けていたら本気で身が保たないと思う。
なので外堀（二人と仲良くなる事）を埋める事から始めている（でないとろくに遊べないからね……）。

『マスター。
河内亮のデータを集めました。』
序でに言うとさっきまで僕は猿真似野郎のデータに興味が出たので『時空管理局』のデータベースにハッキングを仕掛けいた。

「ふ～～～ん……母親が『デバイスマイスター』で父親がこっちの人間だけど『魔力持ち』で『執務官』。
但し父親は既に殉職してるけど『リンディ』さん……というより『クライド』さんの知り合いだった……通りでデバイスを持ってる訳だ。
どうせ誕生日とかで母親にねだって作ってもらったんだろうけどね。」
たく……厄介な奴だよ。
うかうかしてたらこっちは時空管理局全てを敵に回してしまう。
「はあ……昔は『アラン』さんに『秦』さんに『アルテマ』さん達がいたからどうにかなったけど……1人は辛いな～～～……」
感情を捨てていた『白獅子』の頃ならこんなの苦にならなかっただろうけどね……

「ま、どうにかなるさ。」
僕はかつて共に転生者達と戦った仲間達（とその恋人達）を思い浮かべながら立ち上がり家に帰る為に転送魔法を展開した。

……
ルナＳＩＤＥ

「う～～～む……原作開始まで残り一年ですか～～～……」
正直言って面倒ですが……奴『ゼロム・グラシアム』はなんとしても倒さないと下手をすればこっちが撃破されかねません。
何故か私に凄く執着している河内さんを瞬殺した強さからして前世はベテランの戦士だったに違いありません。（注：ゼロムは元々優れた戦略眼や戦闘能力を有していたがそれが転生者達との死闘で一気に開花したためなのでベテランの戦士ではない。）

『で、どう動くのつもりですかマスター？』

アルテミスの問いに私は……

「取り敢えず先ずは一人でも減らします。
その後は……ま、どうにでもなるでしょう。」
最悪『ルル』と『ナナ』に出てもらうという手も無くはありませんが活躍させるのは『A，s編』からですしね。

それに……
「ゼロム・グラシアム……久々ですよこんなにぞくぞくする敵に相対するのは……（にやり）」
あの性悪男『世界の意思』が選んだ転生者がどんな奴かと思ったら……とんでもない奴で安心しました。

「くすくすくす……この戦い……楽しみが出来ましたね～～～……」
私はゼロム・グラシアムとは良いライバルになれそうだという確信めいた笑いをしました。

……
星ＳＩＤＥ

私は今なのは達と一緒に温泉に来ていた。
因みに家族ぐるみなので『アリサ』や『すずか』、亮の家族も全員来ている。（最も亮は親子二人暮しだけど……）
八神零は『姉さんの世話があるから行かない。』と言っていたが何時の間に姉の八神はやてが仕込んだのかお茶に入っていた『睡眠薬』でぐっすり寝込んだ所を私達が連れてきた（因みに八神はやては私に『なのはちゃんと零の恋の懸け橋になろうや♪』と楽しそうな表情で言った。）。
そして皆で温泉を堪能した後私達はこっそり宿を抜け出し川原に来ていた。

今回の温泉は唯旅行をするための物では無く調査の意味合いもある。
「此処であっているのですか？」
「ああ、間違いない。
此処で一年後に『ジュエルシード』が暴走する。
そしてなのはと『フェイト』が奪い合う。」
亮がはっきりと言った。
ゼロム・グラシアムに完膚なきまで叩き潰されて以来絶望に打ち拉がれていた彼ですが最近は何とか持ち直してきたみたいです。
「解りましたでは……時を……「へえ、まだ生きてたんだ猿真似野郎。」！？」
驚いて振り向くとそこには亮を瞬殺し絶望に叩き落とした張本人ゼロム・グラシアムが立っていた。
「……何の用だ？」
「ああ、ちょっとしたご挨拶。
僕は無印とＡ，ｓでは君達に手を出すつもりは無いよ……ＳｔＳでは遠慮も容赦も情けも一切無く粉砕するつもりだけど。」
ゼロムが亮の問いにさらりと答える。
「それから星さん。
河内亮に恋心を持つなら今の内だよ？」
！？な、何故八神零にしか話していない事を知っているんですか！？
「簡単な事だよ？
八神零に『ギアス』を掛けて聞いたんだ。」
「な、何て卑劣な！！！／／／」
私は顔が暑くなるのを感じながら言いました。

「何だかヤバそうな空気が出てるんで……アディオス！！」
「二度と来るな！！！／／／」
私は即座に『アクセルシューター』を走り去っていくゼロム・グラシアムの背中に目がけて撃ちますがあっさり防がれました。
ゴキブリみたいな逃げ足の速さですね……次にあったら星屑にしてあげます！！

私は密かにそんな事を思いながら亮に対する思いもつのらせていっている事に気付いてすらいなかった。

続く

第四話（後書き）

如何でしたか？
次回はゼロムが前世でのもう一つのデバイスを手に入れます。
次回『永遠と再臨』
お楽しみに！

第五話（前書き）

永遠と再臨

第五話

零（ゼロム）ＳＩＤＥ

「（今日からＰＴ事件の始まりか～～～……）」
僕はバスの車内で春の穏やかな日光を顔に受けて眠気を感じながら考えていた。

「（昨日になって思い出したよ……僕が『八神零』としてＰＴ事件に介入するにはもう一つデバイスが必要だって事……）」
『八神零』が転生者では無いと言った以上ゼロを使ったら絶対に僕が『ゼロム・グラシアム』だと猿真似野郎やルナ＝ベルツに気付かれる。

「（はあ……良く考えたら何でガイアメモリはあるのに『リヴァイブ』は無いんだろう？）」
ガイアメモリは単体で使っても確かに強力だけど本来『ペテロ』が作ってくれたガイアメモリの能力を最大にまで引き上げる僕のもう一つのデバイスが無ければ下手をすれば暴走するのだ。

「（はあ……どうしたら良いんだろう……）」
「零君……一体どうしたの？
さっきから難しい顔をして？」
「ふえあ！？／／／」
考え事をしていたらなのはの顔が目の前に出て来たのでつい素っ頓狂な声を上げてしまった。

「えと……新しいクラスに馴染めるかどうか心配で……」
「そうなんだ～～～私も心配だけど零君が一緒なら何処でも良いよ

♪（にっこり）」
「んな！？／／／／／」
なのはの最高の笑顔＋多分男が聞いたら自分に好意を持ってると思う言葉を言われて僕は顔が暑くなった。

「？何で零君の顔が赤くなるの？」
「なのは……あんたといい零といい……鈍感過ぎ……」
アリサがなのはの肩をポンと叩きため息を吐く。

「本当ね。（なのは、もう零君に告白すれば？）」
「ふえ！？／／／（無理だよ……だって……断られた事を考えたら……怖いよ……）」
すずかがなのはに何かをぼそりと告げるとなのはの顔が深紅に染まりあたふたと僕から離れていった。

「？？？なのはは一体どうしたんだろう？」

「（離して下さい亮！
あの鈍感を星屑にしないと気が済みません！）」
「（落ち着け星！
今此処で魔法を使うおうとするな！）」
因みに猿真似野郎と星さんは何でか猿真似野郎が星さんを羽交い締めにしていた。

「（ま、いっか。
……デバイスの事本当にどうしよう～～～～！）」
僕は未だに残っている難問にまた頭を悩ませる羽目になった。

……

「れ、零君……その……今日……私の家に泊まりに来ない？／／／」
昼休みになのはが顔を赤くしながら言った一言で僕の思考回路は完全にフリーズした。

「……え、あ、え……と……何……でいきなり……そ、それに姉さんの世話が……」
「貴方は壊れかけのポンコツロボットですか？
それから八神はやてに昨日電話したら『お泊まり？別にええで？』という風にあっさり許可を貰えましたが？」
姉ぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！
流石にその答えはまるで予測してなかったよ！？
まさか『別にええで？』と言うとは思わなかったよ畜生！

「か、家族は！？なのは達の家族の許可は！？」
僕となのはがキスをした事を知った瞬間……狂戦士と化した恭也さんと士郎さんが木刀と小刀を引き抜いて問答無用で僕に襲い掛かってきた記憶はまだ新しい。

「うん……お父さんとお兄ちゃんは猛反対したんだけど……」
「母さんが『ちょっと交渉するわ』と言って交渉したんですが……」
「すぐに帰って来て『お泊まりを許してくれたわ』って言って……」
「父さんと兄さんは晩ご飯の時にはズタボロになって出て来ました。」
……『桃子』さん……貴女は一体何をしたんですか？
僕は初めて会った際に危うく士郎さんを通報しそうに成る程に若々しいなのはの母親を思い出し頭が痛くなった。

……
ガチャ

「只今〜〜〜。」
「零、お帰り〜〜〜。」
僕は泊まりの準備をするために一度家に帰る事にした。（最も今ごろなのは達は『ユーノ』さんに会ってるんだろうけど……）

「でね姉さん……『お泊まり？別にええで？』って……僕の世話はいらないって事？」
昼休みが終わってからずっと気になっていた事だけど僕にとってはある意味都合が良い（何時でも好きな時に抜け出せるし猿真似達と何時でも戦えるからだ。）けどね。

「……」
あれ？黙り？

「（ぼそり）零は……頑張り過ぎやわ。」
「え？」

「だって……お父さんとお母さんが死んで私が足を悪くして以来零はなのはちゃん達と全然遊ばないし私の世話の為に学校終わったらさっさと帰ってくるし……たまには休むちゅう事をしてや？
だから私は星ちゃんの提案をあっさり受け入れたんよ。」
「姉さん……」
そっか……僕は……姉さんにそこまで愛されていたのか……

「ありがとう……姉さん。」
「どういたしましてや。
それからお土産の『翠屋のケーキ』よろしゅうな？」
「絶対にそれも受け入れた要因の一つだよね！？」
というかそれがメインの様な気がするのは気のせい！？

……
はやてＳＩＤＥ

「行って来ます！！（怒）」
「い、行ってらっしゃい～～～。（焦）」
私『八神はやて』はさっきの発言でがっつり怒った『八神零』がなのはちゃん家に行くのを見送った。

「あ、それから僕がいないからって夜更かししちゃダメだよ？」
ち、鋭いわ。

「解っとるよ。
零もなのはちゃんの家族に迷惑かけちゃダメやで？」
「解ってるよ。
じゃあ今度こそ行って来ます。」
「ん、今度こそ行ってらっしゃい。」
そう言って零は出ていった。

「はあ……」
私は車椅子の背に体を預けつつ思う。

「（本当に零は罪作りやで……なのはちゃんみたいな綺麗な女の子好きにさせといて気付かないなんてな……）」
実の弟ながら姉の私がなんかなのはちゃんに申し訳ない気持ちになる。

「……零……幸せにな。」
私は絶対に治らないであろう足を見ながらそう呟いた。

……

零ＳＩＤＥ

現在僕は『ジュエルシード』の暴走体になのは、星さん共々追い掛け回されていた。
え？話が飛び過ぎだって？
しょうがないじゃん話す事があんまり無いんだから。

因みに何でこんな事になったかって言うと夜になのはと星さんの部屋で寝ていたらなのはが『フェレット（ユーノさん）さんが気になる。』と言って家を出ていってユーノさんのいる動物病院に三人で来てみて見たのは見事に廃墟となった病院とそこに立つジュエルシードの暴走体だった。

「はあ……はあ……ごめん二人とも私が我が儘を言ったばっかりに……」
なのはが息を切らせながら僕等に謝る。

「大丈夫だよ。
勝手に着いてきただけだしこれはなのはの責任じゃないよ。」
「本当にそうですよ。」
僕も星さんも全力で走りながらなのはに……！？

「危ない！」
僕は慌ててなのはを突き飛ばし……

ドゴン！！
「が……あ……！」
僕はジュエルシードが振るった拳で漫画の様に宙を舞った。

「れ、零君！？
嫌ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
「八神零！！」
二人の悲鳴が辺りに響き渡りジュエルシードが二人に向けて拳を振るうけど猿真似野郎が寸でのところで銀色の盾で受け止めそのまま戦闘に入った。

「（畜生……！）」
僕が……ゼロを使えれば……二人を守る力があれば！！

『マスターゼロム……いえマスター零、ライガーゼロだけしか頼らないとはどういう了見ですか？』
え……？
そんな……まさか……

『ふ、マスター。
お久しぶりです。』
「リヴァイブ……？」
僕は本来此処には無いはずのもう一つの相棒の名前を言う。

『イエス。』
……あはは……良かった。

「ぐ……！
こいつも河内君と同じ……力なのかな？」
僕はリヴァイブを知っていると悟られないように芝居を打つ。

『メモリスロットに『永遠の記憶』を装填して下さい。』
僕はリヴァイブの基本形態である小手を装備しそこにある四つのスロットの一つに『永遠の記憶』を持つ『エターナルメモリ』を入れ

る。

『エターナル！！』

『永遠の記憶を確認。

リヴァイブハートゲットレディ……セットアップ！』

「行くぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

僕はジュエルシードと猿真似野郎が戦闘している最中に突撃した。

「零君！良かった……」

「なのは……（撫で撫で）」

「て、二人とも！早く契約を進めてくれ！」

ユーノさんの声に二人は我に帰り契約の続きを始めた。

……

亮《負け犬》ＳＩＤＥ

「亮！」

俺が最初のジュエルシードと戦闘をしていると零が長剣を構えながら走ってきた。

何だあのデバイス！？

見た事無いぞ！？

そう形自体は大したことは無い。

問題はだ……ガイアメモリを接続しているデバイス何て見た事が無いだけだ。

「零！無事だったんだな！」

「まあね、にしてもデカい……」

俺達はジュエルシードから振り下ろされる拳を回避しながら話し合う。

「え～と……リヴァイブハートだっけ？
どうすれば良いの？」
『メモリスロットの一つに何でも良いからメモリを入れて下さい。』
零はその言葉に従い腰に着けたポーチから何と『A』と書かれたガイアメモリを取り出しそれを小手に装填する。

『アクセル！！』
『アクセルムーブ』
そのボイスが流れると……零の姿が一瞬で消えジュエルシードを一度切り裂きその背後に移動した。
は、速い……！

「凄い……凄いや！」
零は『T』と書かれているガイアメモリと『L』と書かれているガイアメモリを取り出しそれを『アクセルメモリ』と交換する。
『トリガー！！』
『ルナ！！』
『『射手の記憶』を確認。
これよりソードモードからトリガーモードに移行します。』
そして零が手に持っている長剣がライフルに変形する。

「くらえぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
零が空中に弾丸をばらまくと弾丸が途中で曲がり全てジュエルシードに炸裂する。

「は！？見惚れてる場合じゃねえ！」
デバイスの『カリバーン』を持ち直し慌てて俺も戦いに参加する。

「龍砲……発射！」
龍砲が次々と炸裂しジュエルシードがたたらを踏む。

「ごめん、二人とも待たせちゃったね！」
「行きますよ！」
星！なのは！契約が完了したんだな！

「（……よし）リヴァイブ、決めたいんだけどどうすれば良いの？」
『『射手の記憶』をそのままライフルに装填して下さい。』
そして零は小手から『トリガーメモリ』を出しライフルに装填する。

『トリガー！！マキシマムドライブ！！』
「『トリガーイクスバスター』！！」
ライフルの銃口が広がりそこから巨大な魔力砲撃が飛び出した。

そして……そのままなのはがジュエルシードを封印しその日の戦いは終結した。

第五話（後書き）

如何でしたか？
次回はゼロムとしてルナ、負け犬、星と海鳴温泉で戦闘します。
次回『獅子とチートと氷撃』
お楽しみに！

第六話（前書き）

獅子とチートと撤退

紅優也「な、ナナの口調が難しい……」

第六話

零（ゼロム）ＳＩＤＥ

ピンポーン

「？宅配便とか無い筈だけど……」
この世界のなのはとこの世界のフェイトさん（（当たり前だけど……）僕の世界のフェイトさんよりは弱かった）との出会いとも言える戦いから数日たった休日に玄関のチャイムが鳴ったので僕は訝しみつつ扉を開ける。

ガチャ
「零君、一緒に温泉に行こう！」
「いきなり何！？」
扉の前にいたなのはの突然の誘いに素早く突っ込みを入れてしまう僕だった。

「ちょっと、なのは。
いきなり言っても伝わる訳無いでしょ？」
と、すずか。

？？？一体どうしたんだ？

「今日は休みだからさ、皆で温泉に行こうって事になってな。
なのはが『零君も誘お！』って言ったから来たんだ。」
と、猿真似野郎。
そうなんだ……

「だから姉さんの世話……「零、温泉に行って来なはれ。」姉さん！？」
姉さんはまたも許可をあっさり出す。
「零。久々に温泉に普段私を世話してる疲れを癒してきなはれ。」
姉さんの麗しき家族愛に涙が止まらない。
「姉さん……解ったよ。
準備してくるからちょっと待ってて。」
僕は温泉に必要な物を取ってくる為に自分の部屋に向かった。

…………

「零君！温泉に入ろう！」
「この展開に何か即視感があるんだけど！？」
ついて猿真似野郎と同じ部屋に入って数分後になのはがやってきて温泉に入ろうと言ってきたのに突っ込みを決めた。
「問答無用だよ！」
「にゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」
僕は初めてなのはにあった時の様になのはに強制的に連行されて行った。

………

ルナSIDE

「はあ～～～。
温泉は気持ち良いですね。」
流石は温泉。
日頃の疲れが癒えて行きます。

あ、こんにちはルナ＝ベルツです。
只今私はフェイトやアルフ、ルルにナナと一緒に今夜発動するジュエルシードを確保するために海鳴温泉に来ておりました。
しかし温泉はバスルームや風呂とはまた違う感じがしますね～～～。
「（ルルにナナ～～～そっちの湯加減はどうですか～～～？）」

私は隣に入る二人に念話で話し掛けます。

「（バッチリだよ～～～！）」
「（ル、ルルが泳ぐ、から、恥ずかしい。）」
あ～～～いますよねそんなガキが。
迷惑がかかるから止めましょうね？

『あ、零君がユーノ君を身代わりに逃げた！』
『（れ、零！？僕を見捨てないでくれ！）』
『（ごめん、ユーノ！
今は尊い犠牲になってくれ！）』
『（う、裏切り者ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！なのは！直ぐに零を追うんだ！）』
『勿論だよ！』
？向こうは一体どうしたのでしょうか？

ドカン！
「何でなのはまで男湯に入ってくるの！？」
「零君が逃げるからだよ！」
「（ふふふ、零！よくも見捨ててくれたね！）」
「（ユーノ！？君の助言か！？）」

私はいきなり温泉にどたばたと入ってきた三人に呆然としました。

何で……何で八神零が此処に！？！？

………

零ＳＩＤＥ

「なのは待って！何で僕を女湯に連れ込もうとするの！？」
「何でって……零君と温泉に入る為だけど？」
いやそれは解るけど……

「僕は男湯に入るからね！？」
「ダ～～～メ！私と一緒に入って！（アリサちゃんは言ってた！こういう時に二人の仲は進展するって！）」
あ、アリサさぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！
あんた何て事を言ってくれるんだ！？

「く……！仕方ない！」
ガシイ！
「（！？れ、零！？何をするんだ！？）」
秘儀！変わり身の術！

「あ、零君がユーノ君を身代わりに逃げた！」
「（れ、零！？僕を見捨てないでくれ！）」
ユーノさんの念話の悲鳴を僕は……

「（ユーノ！今は尊い犠牲になってくれ！）」
サムズアップしながら逃げる事に集中した。

「（う、裏切り者ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！なのは！直

ぐに零を追うんだ！）」
「勿論だよ！」

なのはは直ぐに追ってきた。

大丈夫！男湯に入ってしまえばこっちのものだ！

しかし……温泉は十二歳までは混浴可能だって事をまたもすっかり忘れていた僕は見事になのはも男湯の更衣室に入ってきたので手早く服を脱ぎ温泉に逃げ出す。

ドカン！
「何でなのはも男湯に入ってくるの！？」
「零君が逃げるからだよ！」
「（ふふふ、零！よくも見捨ててくれたね！）」
「（ユーノ！？君の助言か！？）」
そして……

ズリ……ゴッキン！
「「……いったあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」

僕は滑り前にいた銀髪の少年に思いっきり頭をぶつけそのまま意識を遠退かせた。

…………

目を覚ましたら既に夜だった…………ん？
温泉……夜……ＰＴ事件……あ！

「そうだ思い出した！
今日はなのはとフェイトさんがジュエルシードを巡って戦うんだ！」
すっかり忘れてた！
絶対に猿真似野郎やルナ＝ベルツも来てる！

「『ゼロ』！行くぞ！」
『マスター、なのは様の増援に行った方が良いのでは？』
う……そうだった……

「あ、そうだ。」
僕はポーチから『I』と書かれたガイアメモリを取り出しリヴァイブに装填する。

『イリュージョンマキシマムドライブ！！』
その音声と共に等身大の鏡が出現しそこから『僕』がもう一人出て来た。
これが『幻惑の記憶』を持つ『イリュージョンメモリ』の力。
イリュージョンメモリを使えば僕は幾らでもなのは達の増援や転生者との戦いに行ける。

「リヴァイブ！
ミラージュを頼んだよ！」

『解ってます！』
「うるさい！
僕こそ失敗するなよ！」

「解ってるよ！
ゼロ！セットアップ！武装は『イエーガー』！」
『了解！』

僕はイエーガーの最高速度で猿真似野郎達の戦闘場所まで急行した。

……

現場に辿り着くと既に戦闘が始まっていたので僕は上空からイエーガーの本来の姿『イエーガー・改（スナイプ）』に変換すると上空から狙撃を開始した。

直ぐにばれるだろうけどやらないよりはましだろ。

「な！？狙撃！？何処から撃ってきやがる！？」

因みに猿真似野郎しか撃ってないからルナ＝ベルツと星さんには一発も放っていない。

……！来たか！

「ゼロム・グラシアム。

やはり貴方でしたか～～～。」

『アイスダガー』

案の定ルナ＝ベルツが飛行魔法を使いながら僕の所に氷で出来たダガーを大量に放ってきた。

「おっと、そんな簡単にやられたら話にならないからね！」

僕はダガーを躱しつつそのまま接近し『ストライクレーザークロウ』を叩き込む。

「む、中々やりますね。」

ルナはそれを剣で受け止めそのまま斬り掛かってくるけど僕はイエーガーの速度を最速にしそのまま背後に回る。

「んな！？速い！」

ルナが慌てて此方を振り向くけど……遅い！

「『輻射波動刀』……斬！」
僕はゼロの固定武器の中で最大の威力を持つものを引き抜くとそのまま斬撃を赤い波動と共に飛ばし攻撃する。
「ですが……私も速いですよ～～……ＩＳ（インヒューレントスキル）発動……『ライドインパルス』！」
その言葉と共に輻射波動刀から発射された波動はルナが高速で移動した事であっさり避けられる。
「ライドインパルス！？
『トーレ』さんの能力じゃないか！？」
まさか他の『ナンバーズ』の人達の能力も……
「正解です～～『スローターアームズ』！」
『マスター！後方三十度の角度から『ブーメランブレード』が！』
『セッテ』さんのＩＳだぁぁぁぁぁぁぁぁ！？
僕は飛んできたブーメランブレードを何とか弾き飛ばしそのままスナイプの特徴的武装『トルネディア』で狙撃する。
「い！？まさか弾き飛ばした瞬間に反撃とは……優秀ですね～～～。」
「僕は余り魔法の才能が無いもんでね！」
だからこそ格闘術や射撃は極限まで鍛えたんだ簡単には負けない！
「テメエ等……！
俺を……無視するなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「亮！熱くならないで下さい！！」
怒号が聞こえたので下を見ると猿真似野郎が剣を片手に此方に舞い上がってくるのと星さんが一足遅れて此方にやってくる場面だった。
「ち……またお前か猿真似。」
「本当ですね～男と男の真剣勝負を邪魔するとは言語道断です～～～なので……ストーカー兼ＫＹには此処でご退場願いましょう！」
「へ？」
「亮、後ろです。」
何時の間に設置したのか大量の氷で出来たダガーがありそれが一斉に爆発したが星さんに完璧に防がれた。
んな馬鹿な！？
星さんのバリアジャケットはとんでもなく重そうなんだけど！？
何だあの高機動は！？

「行きます。」
僕とルナの後ろにさっきの高機動で回り込まれ砲撃の構えを取る。
は、速い！？

「『ブラストファイヤー』！！」
星さんのデバイスである『ルシフェリオン』に魔力がチャージ……
え？

「ゼロ、換装だ！『シュナイダー』！」
『り、了解！』
僕の体にネイビーブルーの鎧からゼロの格闘戦用の武装である『シュナイダー・改（バースト）』のオレンジ色の鎧に変わり僕は即座に『Ｅ（エネルギー）シールド』を起動し何とかエネルギーを吸収しつつ体勢を整えて着地する。

因みにルナは何と『聖王の鎧』を発動しておりそれで地面に激突しても無事だった。
にしても……どんなチートだよ！？
エネルギーの充填から発射まで０，４秒しかかかってないぞ！？
猿真似唖然としてるし！

「最早貴方達に勝ち目はありません降伏してくれませんか？
貴方達程の騎士なら勝敗は見えていると思いますが……」
やべえ……

「そろそろフェイトは撤退……『メタルマキシマムドライブ！！』
「メタルブラスト！」「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」あれ～～～！？」
ルナが何か呟いていたけどそれはミラージュが『闘士の記憶』を持つ『メタルメモリ』のマキシマムドライブでぶっ飛ばしてきたフェイトさんを見て驚愕に変わった。

「零君、やり過ぎだよ！」
「ごめん、なのは！」
あれ？詰んだ？

「……しょうがありませんね～～～。（ゼロム・グラシアム、転移魔法は使えますか？）」
ルナが念話で僕に話し掛けてくる。

「（？使えるけど……）」
僕は気絶しているフェイトを小脇に抱えながら答える。

「（じゃ大丈夫ですね。）此処は……逃げるが勝ちです！
『アルテミス』！」

『アイスダガー』
即座に大量の氷のダガーを放ち……

「た～～まや～～～！」
『エクスプローション』
全て爆破した。

「そういう事か！転移！」
僕は温泉旅館に座標指定するとそのままルナ＝ベルツやフェイト共々撤退した。

続く

第六話（後書き）

如何でしたか？
次回はゼロムがミラージュととんでもない策を作ります。
それからあの日記が……
次回『策と日記』
お楽しみに！

第七話（前書き）

策と日記

第七話

ゼロムＳＩＤＥ

「う、う～ん……ん？
此処は……温泉旅館か……」
しかもルナ＝ベルツの泊まっている部屋だし……
結局昨日は気絶からの睡眠になったフェイトさんに抱き付かれていたために仕方なく僕はルナ＝ベルツの部屋に泊まる事になったんだ。

「はあ……結局夜中考えても星さんの特典解らずじまいだなあ……」
フェイトさんの『真・ソニックフォーム』の高速移動となのはさんの『エクセリオンモード』の圧倒的な砲撃のチャージスピード……
これを両立出来る特典なんて見当たらない。

「一つ可能性はあるけどね……」
それはもう一人の『自分』を呼び出す事……つまり『イリュージョンメモリ』のマキシマムドライブと略同じ能力だ。

「う～ん……考えてても仕方がない。
散歩に出るか。」
僕は腕に抱きついて寝ているフェイトをそっと退かすとそのまま外に歩きだした。

……

「はあ～～～！
朝の空気は気持ち良いな～～～！」

僕は朝の新鮮な空気を胸一杯に吸い込みつつとてとてと旅館近くの林道を歩いているとこだった。

「あ、僕。」
そういって僕に近付いて来たのはミラージュだった。

「よう、ミラージュ。
お前も散歩か？」
「うん、なのはが腕に抱きついて寝ていて眠れなかったから……」
……僕もフェイトのお陰で眠れませんでした。

「にしてもこれからどうする？」
「何を？」
「転生者ゲーム。
このままだと星さんに圧倒されて終わるぞ。」
星さんの特典を理解していない以上このまま戦っていてもじり貧だ、どうにかして特典を特定しないと次に戦った時にジ・エンドだ。

「う～ん……あ、そうだ。
入れ替われば良いんだ？」
？？？どういう意味だ？

「つまりまた『八神零』に君が成って僕が『ゼロム・グラシアム』に成れば良いんだよ。
それなら僕が死んでも戦いは終わらないし奇襲だって思いのままだよ。」
成る程奇襲と言うのは常に敵の鼻先でかますのが一番効果的だからな。
だけど……

「ごめん……また危険な事をさせて……」
『レイス・クロフォード』との戦いの時もミラージュが身を挺して
僕を守ってくれたから逆転の糸口が掴めたんだ。
前回と言い今回と言い本当に迷惑ばかりかけてるな僕は。

「いやいや、寧ろ僕みたいな君の紛い物が何回も役に立てる事が光
栄だよ。」
苦笑いしながらミラージュが励ます。

「……解ったよ。『ゼロ』。」
『了解しました。
ミラージュ様は絶対に守ります。』

「おっけ。『リヴァイブ』。」
『任せて下さい。
マスター零は守りぬきます。』
僕等は互いの相棒を交換する。

「行ってこい！『ゼロム・グラシアム』。」
「行ってこい！『八神零』。」
僕等はすれ違いに手を叩きあった。

……
ゼロム《ミラージュ》ＳＩＤＥ

「……ゼロ……これは一体……」
『こ、このタイトルは理解に苦しみます……』
僕は今目の前にある『パンドラの箱』が信じられなかった。
だってタイトルが……
『お兄ちゃん観察日記

《復興版》『だもん……

「あのさ……これ誰の？」

『知りませんが……取り敢えず失礼なのは覚悟して中を見てみたらどうかと……』

「う、うん……し、失礼……」

『〇月△日

お兄ちゃん、五時に起床。

その後、ジャージに着替えた後、屋外にて剣の素振りをする。

今日着ているジャージは先週買ったもので生地の色が彼にとても良く似合う。

木剣を振るうたびに飛び散る汗が神々しくもあり、彼がどれ程美しいかが理解できる。

取り敢えずこれは写真として記録しブログにアップしておこう全世界にいる私の同士の為に……』

「待ってえええええええ！！！

いきなりプライバシーの侵害内容！？

肖像権とか君の中で何処に行ったの！？」

『しかも『お兄ちゃんは私のもの私のもの私のもの』ってヤンデレ風味に書いてあるんですが……』

「もうやだこの日記！

一ページ目からこんなに萎える日記って何！？」

『ま、マスター！

つ、次のページを見ましょう！

もしかしたらまともになっているかもしれません！』

と、ゼロの言葉に僕は取り敢えず落ち着き二ページをめくる。

『×月〇日

お兄ちゃんが昼寝をしている。

彼はあの愛くるしい容姿に反して絶大な戦闘能力を誇っている。
寝ていても迂闊に近寄っては気付かれる。
なので家にあった睡眠薬で無理矢理眠ってもらった。
これで彼はしばらく目を覚まさない。何をしても。試しに頬をつついてみたら可愛らしい寝息以外何も反応が無い。
これで寝顔を撮る以外に……』
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？！？！？『バン！』」
『マスター！しっかりして下さい！
取り乱さないで！』
ダメだもうこいつ末期だ！
ヤンデレの末期症状が発症してる！

「もうやだもうお仕舞いだよ！
このままじゃ僕の精神と魂が保たない！」
多分次を見たら魂が消し飛ぶ程の絶叫を発するだろう。

『マスター……此処は押さえてお終いまで見ましょう。
こうなりゃ自棄です！』
うん……そうだね……

「すう～～～はあ～～～～……は！」
僕は気合いと願いを込めて再び日記を開いた。

『△月□日
今日は私の誕生日だ。
家族皆が祝ってくれて私にプレゼントをくれた。
お兄ちゃんはヘアゴムをくれた。
炎の様な飾りがありお兄ちゃんの手作りらしい。
このヘアゴムは私の一生の宝物にしようと決めた。』
「おお……凄いまともだ……」

しかもルナ＝ベルツは意外にも妹思いらしいね。

『良かったですねマスター。』

僕はゼロの言葉で安心しながら続きを見る。

『夜、誕生日だから二人きりで寝させて欲しいと言ったらＯＫしてくれた。

お兄ちゃんの部屋は良い香がする。

これがお兄ちゃんの部屋の匂いかあ……

記憶に刻むのはもちろん、全身に循環させる様に深呼吸を……』

安心が吹き飛んだ。

『マスター！？

一瞬ですが貴方の生命活動が全て消え去りましたよ！？』

僕はゆっくりとゼロに日記の変態チックになっている部分を見せる。

『……今、一瞬ですが人格形成の部分に重大な損失を受けました。』

「だよね……」

もう此処まで来たら見るしか無い！

「南無三！」

僕は日記の続きを見る。

『深夜、彼はぐっすり眠っている。

当然だ。例の睡眠薬を彼が飲んだホットミルクの中に混入した。

これで何をしても大丈夫だ。

普段は一緒に寝たがるナナが入るが彼女は今フェイトお姉ちゃんと一緒に寝ている……』

……この文章を見る限り敵《ルナ＝ベルツ》はＰＴ事件ではフェイトさん側で戦うつもりだね。

これが解っただけでも良いとしよう。

僕は最後の力を振り絞って日記を見る。

『……つまり、これから周囲の気にする必要が無いので好きな事が出来る。

その時に服なんて邪魔な布は必要無いよね？

私はお兄ちゃんの寝巻に手を掛け……』

「もう……無理ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！」

僕は周囲に憚る事なく全力で絶叫した。

………

第三者ＳＩＤＥ

余談である。

ゼロムの絶叫で目を覚ましたルナとフェイトはルルの作った復興版の観察日記を見てフェイトは絶句しルナはルルの執念深さに驚愕しゼロムは魂が抜けていた。

当然ルルは二人にガツンと怒られゼロムはフェイトたっての頼みによりルナ達が住んでいるマンションに運ばれた。

続く

第七話（後書き）

如何でしたか？
次回はゼロムがフェイト及びルナと共同戦線を築きます。
次回『提携と共同戦線』
お楽しみに！

第八話（前書き）

提携と共同戦線

第八話

ゼロム《ミラージュ》ＳＩＤＥ

僕が目を覚ますとそこにはフェイトが心配そうな顔で僕の様子を見ていた。

「……あれ？此処は何処？」

「私達の住みかですよ～～。」

咄嗟に起き上がるとそこにはルナ＝ベルツが薄ら笑いを浮かべて立っていた。

ヤバイ……今僕は絶体絶命だ……

「（いやいや……そう構えなくても大丈夫ですよ～～？何故なら……『今は』貴方を倒す気は無いからです～～。）」

「（『今は』？）」

「（はい～～今デバイスも無くて布団に寝ている貴方を倒しても満足出来ません。だから……今日は同盟を頼みに来ました～～。）」

僕の疑問に答える様にルナ＝ベルツは念話で僕に話し掛けてきた。

「（同盟？殺しあいをしてる僕等が同盟するのは殆ど自殺行為に近いんだけど……）」

何時背中からルナ＝ベルツの魔法が来るかそれとも剣が振るわれるかを考えていたら戦闘に集中出来ないからね。

それに『イリュージョンメモリ』で発生した僕は絶命すると消えてしまうそれによって零……いや僕の本体が転生者だとばれてしまう

恐れがある。
「（いえいえ、同盟と言うのは貴方とフェイトとの同盟ですよ。）」
！？しまったその手か！
即ち僕がフェイトに組しても利益は無いけど組すればこの場を乗り越える事ができる。
だけど断れば即座に僕は殺されるだろう。
「（……卑怯だね。）」
「（いやはや外道な手段は私達『ベルツ』の得意分野ですよ。
……さ、どうします？）」
ルナ＝ベルツは薄ら笑いを更に深くして僕に決断を求めてくる。
「（……解ったよ。協力しよう。
但し……フェイトとだけね。）」
それを念話で言うとルナ＝ベルツが『しまった！』という顔になる。
充分に考えたうえで実行に移したんだろうけど詰めが甘いよ、僕はゼロムがどんな危機に瀕しどんな形で危機を乗り越えたのかも知っている。
つまりフェイトとだけ協力すればルナ＝ベルツに裏切られた時に管理局に保護を頼めば良いし万が一捕縛されてもフェイトの協力者として問答無用で監獄送りは免れる。
それにフェイトと一緒に入るという事はフェイトを支える機会に恵まれるという事だ。
原作ブレイクは避けたかったけどやる時はやらなきゃね。
「ねえ、フェイトさん。」
「え？何……ゼロム君？
それから呼び捨てで良いよ何かこそば痒いし。」
「解ったよフェイト、それから僕の事も呼び捨てで良いよ。

……共闘しない？」
「え！？」
フェイトが驚きと歓喜が入り混じった表情になる。
「フェイトは『ジュエルシード』を集めたい、僕は『河内亮』達を倒したい。
僕達の利害は一致しているから共闘しても悪い事にはならないと思うけど？」
僕の言葉にフェイトは思案顔になる。
多分共闘しても良いかどうか考えてるんだろうね。
「解った、これから宜しくねゼロム。」
よし！これで僕がＰＴ事件に絡む為の布石は整った！
「うん、宜しくねフェイト。」
僕はフェイトが差し出してきた手を握り握手をした。
……
フェイトＳＩＤＥ
「（私……一体どうしたんだろう？）」
私……『フェイト・テスタロッサ』は先程共闘を宣言した私と同い年の少年……『ゼロム・グラシアム』に握られた手を見ながらこう思った。
私は初めてゼロムに会った戦い……その時に私は気絶しかけてたんだけどその私を抱き上げてくれたのは他でも無いゼロムだった。
その時を思うと何故か胸の辺りがキュッてなって頬が熱くなる感覚がする。

「（……ま、いっか。
後で解るよね。）」
私は母さんの願いの為に……負けられないんだ！

……
フェイト・テスタロッサはその時に気付いてはいなかった。
それが後の戦いに大きな影響を及ぼす恋だと言うことに……

続く

第八話（後書き）

如何でしたか？
次回は星の能力が解ります。
次回『狙撃と正体』
お楽しみに！

第九話（前書き）

狙撃と正体

第九話

ゼロム《ミラージュ》ＳＩＤＥ

「……やっぱり幾ら考えても解らないや。」
今日は市街戦がある日だけどやっぱり星さんの能力が解らない事には対策の立てようが無い。

「移動系の能力と予知等の能力……それらを両立……？」
両立？違うそれ自体が間違いだったんだ。
多分この仮説が合っていたとしたら……そりゃ強い筈だこんなチートは古今東西聞いた事も見た事もない。
（『レイス・クロフォード』ですらやらなかったしね。）

だからこそ星さんは自分の特典の対策を立てられる筈が無いとたかを括っているだろう。

だけど……
「『神の卵（ハンプティ・ダンプティ）』の名は伊達じゃないよ。（にやり）」
僕は神の卵に入っている『ある能力』を思いほくそ笑んだ。

……
夜……

「（とは言ったものの……先ずはこいつを片付けないとね。）」
僕は今猿真似野郎と戦闘を開始していた。
これはルナ＝ベルツが言い出した事で猿真似野郎を別の次元世界に閉じ込めその間に星さんを倒すという作戦だった。

「く……！ゼロム・グラシアム！
何でお前みたいな手練の奴がルナなんかにつくんだ！可笑しいだろうが！」
……何なんだよこいつはまるで『自分が正義だ！』と言っている様な口調で言って……そういうのは！

「ちゃんとした強さを身につけてきてから言え！
ゼロ！『シュナイダー』だ！」
『了解。コマンダーインストール……『シュナイダーバースト』展開！』
僕は輻射波動刀を振るって猿真似野郎の剣を弾き飛ばすと即座にシュナイダーを展開し体の周りを舞う七本の剣『ブレードビット・改』を腕に装着した輻射波動刀に集結させる。

「？何をする気だ？」
僕は無視して七本全てが腕に集まった事を確認するとブレードビットに輻射波動を流し込む。

「！？まさか……」
「仕舞だ。
『輻射波動七連爪剣』！」
僕は輻射波動の紅い光を纏ったブレードビットと共に突撃しそのまま猿真似野郎の防御を貫き吹き飛ばす。

「が……」
「じゃあな、弱った体で探検でもしてろ。
それから僕はルナ＝ベルツと共闘してるんじゃない。フェイト・テスタロッサと共闘してるんだ。
『チェシャ猫（チェシャ・キャット）』。」
僕は神の卵に元々内蔵されていた能力を使い猿真似野郎を別の次元

世界に飛ばした。
「さてと……ルナ＝ベルツと合流するか。」
僕はあらかじめ言われていた合流地点へ向け飛翔を開始した。
……
星ＳＩＤＥ
私達は今、街でジュエルシードを探索しているところです。
亮が言うには此処で発動するらしいです。
今回もルナ＝ベルツという女性（同い年の筈ですから少女ですが）とゼロム・グラシアムという少年がやってくるのは解っています。
断片的な情報しか入らないとはいえこれは確実です。
あまり先の事だとそうなるのが弱点ですがね。

「もう遅い時間ですね。
本来ならもう帰宅しなければならない時間ですが……」
「あの……さっきから姉さんが携帯に『帰ってきなはれ（怒）』ってタイトルのメールを何通も送ってくるから帰っても良いですか？」
「却下です。（にっこり）」
「で、ですよね～～～。」
私は帰ろうとする八神零に軽く魔力を含んだ殺気を放ち牽制する。
それにしても早く発動しないのでしょうか？
私の予知によればそろそろ発動する筈ですが……
「（亮、そろそろ発動しますよ。）」
私は念話で亮に話し掛けますが返事が返ってきません。
『今日こそ絶対にゼロム・グラシアムとルナ＝ベルツを倒す！』と

言っていたので帰るはずは無いんですが……

「（亮、聞こえるのですか？）」

「（残念だけど彼は出られないよ。）」

聞き慣れた声の念話が聞こえた瞬間膨大な魔力と共にジュエルシードが発動しましたがユーノが咄嗟に結界を張り被害を防ぎました。

「（さてと……ジュエルシードは高町さん達に任せましょうか～～私達は私達でやるべき事があるでしょう？）」

「（……亮はどうしたのですか？）」

念話を聞く限り絶対にルナ＝ベルツとゼロム・グラシアムは一緒に来ています。

「（ああ、彼はちょっとフルぼっこにした後別の次元世界に転移させた。

今頃出口を探して走り回ってるんじゃないかな？）」

「（！？やはり貴方だけは許せません！）」

私は取り敢えず勘でゼロム・グラシアムに砲撃を放つ。

「（～～♪戦いはそうじゃなきゃ始まりませんね～～。）」

ルナ＝ベルツの念話から私は避けられたと感じると半歩下がる。

「（じゃ、始めましょう……死合いをね。）」

さっきまで私のいた場所に狙撃が……な！？

「馬鹿な！？

『ディバインバスター』！」

何ともう一発は『私が避けた場所』にやってきました。

「（へえ……やりますね。
まだまだ行きますよ！）」
私はゼロム・グラシアムの評価を『即座に倒すべき人物』として脳内インプットし即座に狙撃がされた位置へ砲撃を開始した。

……
ゼロム《ミラージュ》ＳＩＤＥ

「む、やるね。
ゼロ、『カードリッジ』をリロード《装填》。」
『了解、カードリッジリロード。』
僕は向かってきた砲撃魔法を見ても焦らずにトルネディアのカードリッジをリロードし一撃で消滅させる。
え？何でまだ登場していない『カードリッジシステム』を使えるかって？
それはゼロが元々カードリッジシステムを内蔵している上に作戦開始までに大量にカードリッジを作ったからね、技術は使わなきゃ損だよ損。

「そいじゃ第二射行きますよ！」
「（はいは～～～い。）」
別の場所で狙撃をしているルナ＝ベルツが応じたので僕はそのまま射撃した。

星さんはあっさり避けるけど直ぐにルナ＝ベルツの射撃が訪れこれは何とか回避する。
これはゼロム《本体》が作った『予知殺し』で別々の場所から余り時間を置く事なく狙撃をする事で予知をする暇さえ与えず打ち倒すというのを前提にした戦法だ。

「にしても……避けるね。」
さっきからルナ＝ベルツの矢も僕の銃撃も回避されている。
「じゃあ……ゼロ、トルネディアを『ライフルモード』から『ランチャーモード』へ移行。」
『了解。』
次の瞬間トルネディアの銃口が変化し砲門へと変化しその中に膨大な量の魔力が集中する。
「狩り尽くせ！『ハンティングブラスター』！！」
イエーガーの最大威力の魔法を使って一気に決める！
「（それじゃ私もアイスダガー一斉掃射～～～。）」
四方八方からきた氷のダガーと空から降り注いできた砲撃を防ぐ事は出来ないと思ったけど……
『！？マスター！
『空間魔法』と『時間魔法』の両方を感知しました！！』
……やっぱりね。
今『時間魔法』って聴いて『へ？』って思った人入るでしょ？
某魔法少女みたいに時間を巻き戻したりは出来ないけどそれでも物体の時間を止めたりは出来る（これが『ロストロギア』の封印に使われる技術だ。）のが時間魔法。
『空間魔法』は文字通りに空間を司る魔法だ。（転移魔法が代表的だね。）
これを持ってるって事は……

答えは次回！

第九話（後書き）

如何でしたか？
次回は星がゼロムにより敗れそうになります。
次回『月下落葉』
お楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4657z/

第二の人生はゲームらしいです～『イレギュラー』

2011年12月25日23時48分発行